

東南アジアのナショナリズムと 華人「同化」の実像

インドネシア、タイ、フィリピン、マレーシアを中心とする比較研究

Comparative Study of Nationalism and 'Assimilation' of Chinese in Southeast Asia:
Focusing on Indonesia, Thailand, Philippines and Malaysia

黄蘊 (HUANG Yun)

本論集は、2019年度京都大学東南アジア地域研究研究所共同研究「ポストスハルト期におけるインドネシア華人の文化とアイデンティティ——ネットワークの観点からの考察」、2020年度同共同研究「冷戦下における華人の文化表象「空白期」についての比較研究——インドネシア、タイ、フィリピンを中心に」、2021年度同共同研究「東南アジアのナショナリズムと華人「同化」の実像——インドネシア、タイ、フィリピン、ベトナムの比較研究」という一連の共同研究の成果物である。

東南アジア地域は多くの華人移民(中国系移民)とその子孫を抱えていることで知られている。それぞれの国民国家において華人移民がどのように位置づけられ、現在に至っては彼らがどのように国民化してきたのかをめぐっては、これまで多くの研究上の関心が払われてきた。1960年代から1990年代までの冷戦期においては、反共ナショナリズムという時代の動向の中で、インドネシアをはじめ各国の華人住民は概ね疑念を抱かれ、そのエスニック文化の実践、表象はかなりの程度において制約を受け、華人の文化表象において「空白期」があったことが指摘されている。しかし果たして本当にこの時期に華人のエスニック文化の実践はなかったのだろうか。本論集はこれまでの「一般論」とは異なる冷戦期における華人のエスニック文化の実践、表象の一面に光を当て、冷戦期の記憶がまだ風化されていない現在において、同時期における東南アジア華人の文化実践とそのアイデンティティの様相について再考するという問題意識をもつものである。同時に、現在それぞれの国の華人住民はまたそれぞれ独自の国民化の様相

をみせているという現実もある。その背後にどのような歴史的・社会的な下積みないし伏線があったのかについても本論集は照射したい。

インドネシア、タイ、フィリピンの3カ国を比較研究の対象とするのは、これらの国々はいずれもこれまで強硬な国民統合政策ないし華人に対して不寛容な政策をとっており、それぞれの国の華人住民の同化が進み、もしくは抑圧されてきたとされているからである。3カ国はいわば独裁的な同化政策と国民統合の典型例とみなされている。しかし、上記のような時代的風潮の中においても、それぞれの国の華人のエスニック文化の実践が途絶えていなかったことが事後的に確認できている。それは、本論集のなかでも明らかにされているインドネシアの西カリマンタンやメダンといった国民国家のやや周辺部の事例や個人的なライフヒストリーに示されている人々の具体像にその端緒が求められる。

上記の国々以外に、本論集は、マレーシア、シンガポールをも直接的、間接的な考察対象とする。この両国は上記のインドネシア、タイといった国のように、明確な華人「同化」政策を実施してきていないが、多数派の原住民たるプミプトラや自国の地理的・政治的ポジションといった要素への配慮から、多かれ少なかれ華人の教育および一部の文化実践に対して制限などを加えてきた。しかし一方で、マレーシアもシンガポールも現実的に多少齟齬があるものの、理念上基本的に多民族・多文化共生をうたっており、結果的にも基本的に華人系、インド系といった外来移民のエスニシティ、エスニック文化の存続が実現されている。したがって、マレーシアとシンガポールは上記

の華人の「同化」が進行しているとされる国々と状況が異なっており、両国における華人の「非同化」を論証する必要性がないことはほぼ明白といえる。本論集ではナショナリズム、国民統合のあり方、また華人の生のあり方の比較という意味でマレーシアとシンガポールの事例も取り上げ、またほかの東南アジアの華人の「避難先」、文化的なネットワークの結節地点という性質をもつ存在としてこの両地域の役割について考察を加えたい。

なお、本論集では、同化とは現地社会、マジョリティ民族への社会的・文化的同化と定義して考察を行う。結論を先取りして言うと、インドネシア、タイなどの強硬な同化政策がとられた国において、華人住民は政治的のみならず文化的・社会的な意味においても同化が進んでいると一般的にいわれるが、個々の詳細な文脈に目を向けるとそこにはより豊かで複合的な現実（非同化という現実）もある。本論集では、個々の現場にみられるダイナミックな現象を掘り上げ、華人「同化」の実像、また各国のナショナリズムのあり方について再考したい。

東南アジアの華人研究においては、これまでのインドネシア、タイの華人研究のように、主に華人の現地社会への同化や国民統合の問題に関心が寄せられてきた。インドネシアやタイの国民統合政策の変遷、そのプロセスにおける対華人政策や華人の現地社会への「同化」の諸相などが描かれ議論されてきた〔北村 2014；貞好 2016；スキナー 1988；村嶋 1989ほか〕。いわば国民国家という枠組みの中において華人のあり方を捉えようとした研究がほとんどであった。しかし、近現代における中国人の東南アジアへの移住・定住にはさまざまな偶然性が伴い、また一旦移住したあとでも再移住やいくつかの地域間を往来しながら暮らすというパターンがあることも無視できない。マレーシア政府による華人やインド系住民に対するさまざまな不利な政策をきらい、ここ数十年シンガポールやオーストラリア、欧米などに再移住したマレーシア華人は多数いる。再移住先に暮らす移住者たちの子供世代は必ずしもマレーシア華人というアイデンティティを維持するとは限らない。すなわち、どこかの東南アジア国家に結果として移住、定住はするものの、それはある種の偶然性のもとでの行為であ

り、その後必ずしもその地域ないし国民国家とは不動の結び付きが維持されるとは限らない。そのため、国民国家という枠組みを外して人々の生き方の諸相を捉える視点も必要で、そのことも視野に入れた考察を進めることではじめて東南アジアの華人に対する包括的な認識が得られるのではなかろうか。

脱国家的に経済活動などを展開する華人とそのネットワークに注目する研究はすでに複数ある。しかし、それらは村上〔2013〕、陳〔2015〕、工藤〔2021〕などのように華人の経済ネットワークと経済活動を主に考察したものか、Wong〔2008〕、片岡〔2014、2021〕のように再移住やその中における社会的ネットワークの構築と文化の拡散に注視したものというように、特定の領域の現象に主として目を配るものであった。そうした経済的、社会的ネットワークの構築や脱国家的な活動の展開と、華人のエスニシティの維持やエスニック文化の実践・存続との間にどのような関連があり、どのような影響があったのかについての考察はなされていない。一方で、現実として、国民国家の領域内において同化政策や抑圧的な政策が施行されても、華人たちはそれらをくぐり抜けて国外に教育や文化活動の機会を求め、それによってエスニック文化維持のための栄養を吸収することもよくみられる現象である¹⁾。脱領域的なネットワーク構築と活動の展開は、同時に文化の伝達、交流にも多分に結びつく行為であり、そのような現象に付随する文化的な意味も掘り上げるべきである。

脱国家的なつながりに関しては、Chineseの国際移動や地域をまたがる経済活動の展開を歴史的に捉えようとした濱下は、送金やビジネスの展開といったことに基づく華僑ネットワークを国家・地域などに包み切れない非公式チャンネルと捉え、また現代という新時代においても伝統的な同郷、同業、同族のネットワークが金融危機、経済危機、社会変動などに際し活用されている状況があると指摘した〔濱下 2013〕。つ

1) 高村はタイ・マレーシアの国境における日常的な越境通学の現象に注目し、タイ側の華人子弟が華文教育の機会を求めてマレーシア側の学校に日常的に通学しているのみならず、タイ側のマレー・ムスリムも母語教育と宗教教育の機会を求めてマレーシアに越境通学していることを明らかにしている〔高村 2012〕。ほかに、現代シンガポールの華文作家寒川氏がインドネシアの華字紙『国際日報』や『印華日報』の編集、執筆を担当したりするなど、越境的に栄養を提供するといった現象は複数ある。

まり、国民国家という公式の枠組みとは別に、非制度的・非公式に存在する脱国家、脱地域的なつながり、連携が歴史的にまた継続的に存在しており、そうした公的ではない裏の一面にも目を向けるべきということである。なお、ここで加えておきたいのは、濱下が指摘したような経済の領域のみならず、文化実践・宗教活動・教育などの分野においても上記のような非公式の脱国家的なつながりの存在が認められることである。そのような非公式なチャンネルの存在とその意義に対して、より目を向けるべきではなからうか。

他方、国民国家という枠組みにそって当該国のナショナリズム、対華人政策とその影響を考察するにあたっては、複数の落とし穴ないし考慮すべき局面が存在するため、その際複眼的な考察視点が求められる。たとえば、スハルト体制下のインドネシアの対華人政策は、表面的に「同化政策」的側面があったが、華人のアイデンティティを完全に消去することがその目的ではなく、華人の存在がインドネシア社会の中で問題化しないように、政府が華人を管理・監視、時には動員できるようにすることがその意図するところであるとされる[相沢 2007; 津田 2012]。つまり、スハルト体制の対華人政策の本当の目標、意図は必ずしも明快といえないため、政策の施行上の齟齬や落とし穴も多々あったと考えられる。また、広大な国土を擁していることから、地域性などに起因する政策施行の不一致、さらに華人の家庭内や個人レベルの行動まで到底制御が不可能といった状況もある。こうした状況があることを踏まえ、個別の文脈に密着しながら、ダイナミックな現実を多面的に描き出していくことが求められる。

本論集は上にあげたような切口や視点を重視して意識しながら、それぞれのフィールドから考察を行っていく。以下、本論集の各章の主な内容とその論点を紹介しておきたい。

第1章「流動する自己の生を求めて——華人系ジャワ人ダンサーの活動軌跡」(福岡まどか)は、華人の「同化」政策が強硬に実施されたスハルト体制期に、ダンサーとしての訓練を積んで上演活動を展開した華人系ジャワ人ダンサーの活動軌跡とその自己探求のプロセスを考察したものである。ディディという芸名をもつ華人系ジャワ人ダンサーの表現活動の特

徴として、特定の民族的特徴の表出よりも、アジアの多様な芸術伝統を重視してそれらを自分の創作活動のなかに取り入れていくというスタイルがある。そのようなスタイルはジャワの創作舞踊家に多くみられるものではなく、多様な文化に触れながら育ったというディディの生い立ちや文化的経験、また文化や民族に対する単線的で本質主義的な発想へのディディの抵抗意識に由来するものであると福岡は指摘している。スハルト体制期に華人系ダンサーなどの華人アーティストたちは自由に表現活動を行うことが難しく、ディディをはじめ間接的に異議申立てする人々がいた。福岡はディディがどのように自身の体験を踏まえ自分なりの表現方法や「抵抗」の仕方を構築していったのかを詳しく分析している。その「抵抗」の仕方には間接的な批判ないし異議申立てという巧妙さがあり、抑圧的な政策が施行された中で華人の生のバリエーションを示す貴重でユニークな事例といえる。

第2章「インドネシアにおける華人同化政策の地方への展開過程——西カリマンタン州ポンティアナック市の事例からの考察」(松村智雄)は、スハルト体制期のインドネシア中央政府による華人「同化」政策の地方への展開の仕方、華人「同化」の実態を捉えようとしたものである。西カリマンタン州とジャワなどのインドネシアの中心地域とは状況が異なっており、1960年代まで待たないと国家による統制や管理は波及しなかった。1967年に共産主義ゲリラへの弾圧も絡んで内陸部の華人追放や華人に対する軍事的管理がなされ、その中で西カリマンタン州の華人たちは国家権力側に対して不信感をもち、両者の間の対話は難しい状況にあった。そうした状況を踏まえ、松村は華人住民が3割を占める州都ポンティアナック市にある華人団体の西加孔教華社総会(YBS)という団体の存在とその役割に注目し、そのような半民半官の組織の果たす機能から西カリマンタン州の華人社会と政府との関係性の結び方、またそこからみえてくる地方社会における華人「同化」の実像を浮かび上がらせようとした。松村の考察から分かるように、国家政策の地方における展開は思ったほど強硬なものでもなく、エスニック・マイノリティは国家権力と交渉しながら自己のあり方を模索してきたのである。

第3章「エクリチュールと「声」の間——福建省晋

江橋批の多声的解釈」(宮原暁)は、福建省の郷里に送る送金つきの手紙「僑批」というフィリピンの中国系移民やその子孫が行う文化実践を取り上げ、その行為にみられる移民の母文化にある規範的言説に対する服従や対話を読み取ろうとした。「僑批」という手紙の様式には、規範的な定型文や様式がみられると同時に、インフォーマルな反規範的な内容ないし声が並列されていることも観察される。宮原はそうした現象から中国文化における中心対周辺の関係性、中心による周辺の包摂の仕方が見え隠れすると指摘した。そのような文化実践からは、移民とその子孫のある姿勢もみえてきようか。つまり、出自民族の文化にある規範、その権威性のある程度認めつつも、ローカルな文脈に合わせた多義性、多様性も自由に織り交ぜていくというものである。移民とその子孫は出自民族の文化の一部規範を継承しながら独自の創造も行っているという自主性がそこに見いだせないだろうか。

第4章「華文学校をめぐる越境的つながり——インドネシア・北スマトラ、タイ、マレーシア・ペナンの華人間のネットワークと文化交流」(黄蘊)は、とくに1960年代以後、インドネシア、タイにおける華文学校の閉鎖などの強硬な対華人政策に伴い、マレーシア・ペナンに相対的に近いインドネシア・北スマトラ、タイ南部の華人子弟がペナンに越境就学する現象を取り上げ、その現象の意義とその後の影響について分析する。華人子弟は就学の機会や生存の幅そのものを求め、歴史的つながりなどを生かして、華人の文化・教育活動が相対的に自由という圏域にその可能性を探ろうとした。当事者たちのその後の人生においては、かつての越境就学といった体験はすぐに消え去る記憶でもなく、それぞれの生のあり方の模索・形成に少なからぬ影響があったことが論じられる。

第5章「中国人でなくマレーシア華人であること——馬華文学雑誌に見るアイデンティティの諸相」(舛谷鋭)は、マレーシアの華人作家によって執筆される中国語(華語)の文学作品という馬華文学を対象として、馬華文学雑誌『蕉風』のこれまでの歴史、成り立ち方について議論を展開した。『蕉風』は数少ない馬華文学の媒体で、1955年にシンガポールで創刊された。『蕉風』の編集者、執筆者として、中国大陸生まれの移民作家、シンガポール・インドネシア華人

作家などさまざまな背景をもつ人々がいた。また、文芸誌としての『蕉風』の内容もバリエーション豊かで、1970年代にみられたマレー文学紹介、欧米文学の紹介・特集、移民文学特集などがあった。この雑誌にはその後一時停刊もあったものの、馬華文学を支持する文学愛好家たちによってふたたび復活した。一つの華語文芸誌の成り立ち、またその扱う内容から、マレーシア華人そのものの歴史がよみとれ、華人の複合的な生のあり方もそこに重なってみえてくる。

第6章「マレーシア華人の統合と同化——マハティール前首相の回顧録から考える」(山本博之)は、22年にわたりマレーシアの首相を勤めたマハティール・モハマド元首相による2021年刊行の回顧録を取り上げ、多数派であるマレー人による華人のマレー人や現地社会への同化についての一意見として詳しく分析した。マハティールはマレーシアの政治界において長らく活躍した政治家で、その見解は個人的なものとはいえ、マレー人エリートの一部の人の考えを反映しているといえる。マハティールの見解に対しては、華字紙などから早速反論がなされ、2つのエスニック・グループ間の隔たりが改めて鮮明になった。マレーシア華人の現地社会への同化と統合の問題について、山本は、現地生まれと混血という二つの意味を兼ね備えるプラナカンというグループの人々の事例を通してその糸口を提示した。宗教的、文化的に隔たりがあるエスニック・グループ間の問題を解決するにはその両者を取り結ぶ中間的な存在が必要で、またそのような生のあり方も多民族国家の統合を考える上で一つの可能性ないし方向性を秘めていることが示された。

本論集の各章はそれぞれ異なる主題に即して多彩な議論を展開している。内容のバリエーションはあるが、共通しているのは同化か非同化という一元的な現象ではなく、エスニック・マイノリティの文化表象・アイデンティティには多分に多義性が内包されているということである。人々の生の複合性、多義性こそが現実であり、重層的な文脈に密着して現実そのものを立体的に捉えていくことがますます求められる。本論集が今後の議論の深化の出発点となることを願っている。

参考文献

日本語

- ウィリアム・スキナー〔山本一訳〕(1988)『東南アジアの華僑社会——タイにおける進出・適応の歴史』東洋書店。
- 片岡樹(2014)「想像の海峡植民地——現代タイ国のババ文化にみる同化と差異化」『年報タイ研究』14号、pp. 1-23。
- (2021)「国民国家時代のメダン・ペナン・プーケット・コネクション——華僑華人移民と東南アジア現代政治」『マレーシア研究』第10号、pp. 1-19。
- 北村由美(2014)『インドネシア 創られゆく華人文化——民主化以降の表象をめぐって』明石書店。
- 工藤裕子(2021)「オランダ領東インドの客家系商人——20世紀初頭の事業展開とアジア域内ネットワークを中心に」『華僑華人研究』第18号、pp. 7-27。
- 貞好康志(2016)『華人のインドネシア現代史——はるかな国民統合への通』木犀社。
- 高村加珠恵(2012)「国境を越える子供たち——タイ・マレーシア国境東部における日常的越境と法的地位」陳天璽・近藤敦・小森宏美・佐々木てる編著『越境とアイデンティフィケーション』新曜社、pp. 166-199。
- 陳来幸(2015)『近代中国の総商会制度——繋がる華人の世界』京都大学学術出版会。
- 津田浩司(2012)「バティックに染め上げられる「華人性」」鏡味治也編『民族大国インドネシア——文化継承とアイデンティティ』木犀社、pp. 117-157。
- 濱下武志(2013)『華僑・華人と中華網——移民・交易・送金ネットワークの構造と展開』岩波書店。
- 村上衛(2013)『海の近代中国——福建人の活動とイギリス・清朝』名古屋大学出版会。
- 村嶋英治(1989)「タイにおける中国人のタイ化」岡部達味編『ASEANにおける国民統合と地域統合』日本国際問題研究所、pp. 115-141。

英語

- Wong Yee Tuan. (2008) “Penang’s Big Five Families and Southern Siam during the Nineteenth Century”, Michael J. Montesano and Patrick Jory (eds). *Thai South and Malay North: Ethnic Interactions on a Plural Peninsula*, NUS Press, pp. 201-213.